

臨床肺生理学部門の新設に当って

佐 川 弥 之 助

難産の末、臨床肺生理学部門が誕生した。生れた部門は未熟児である。しかも、これを取りまく環境は決してめぐまれていない。しかし、不肖の子供ほど可愛いという。私共はこれをしっかりした一人前の部門に育てねばならぬと決心している。諸先生方の御指導、御鞭達を切にお願いする次第である。

さて、内規の申し合せに従い、加藤幹夫助教授を紹介する。

同助教授は、昭和28年京大医学部を卒業後、胸部研外科に入られたが、直ちに国立療養所春霞園に勤務され、以後、当研究所副手、高槻赤十字病院医員、カリフォルニア大学心臓血管研究所研究員、高槻赤十字病院臨床検査部長、天理よろづ相談所胸部外科副部長、同部長を経て今回助教授に就任された。尚、昭和40年からは

当研究所の非常勤講師を勤められている。

履歴をみても、おわかりのように文部教官の経験は全くなく、とかくマンネリズムにおち入りやすい教官人事に新風を吹きこんだものとい得る。専攻は胸部外科であるが、胸部研外科に入局以来、肺生理の研究に没頭され、カリフォルニア大学留学中は肺生理学の世界的な大家である Comroe 教授に師事し、Staub 教授との共同研究である「hypoxia の肺循環に及ぼす影響」はこの方面の研究としては決定的なものである。現在、呼吸不全の研究に従事され、将来が大いに期待される。また、その誠実、温厚な人柄は特筆すべきものがあり、大人数をかかえて、とかくうるさい胸部外科の中にあって、悪口を言われたいのは、加藤君ぐらいだろうとの噂が専らである。